

斎藤茂吉の老いの諸相

小 泉 博 明*

【要旨】 高名な歌人で、精神科医である斎藤茂吉の老いの諸相を凝視し、その底流にある生死観を考察し、宗教観にせまろうとするものである。老いはなかなか自覚できない。家族や周りの年下の人たちが本人の老いを早く認識する。人間は他人の目のなかで老い、そしてゆっくりと自らの老いを受容していくのである。茂吉の十七の歌集の中で、晩年の作は『小園』『白き山』『つきがけ』である。また、老いは、本人よりも周りの者が早く気付くが、茂吉の門弟である佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』、田中隆尚『茂吉随聞』、板垣家子夫『斎藤茂吉随記』の日々の記録が、茂吉の老いを冷徹に見つめている。また、長男茂太『茂吉の体臭』、次男宗吉（北杜夫）『茂吉晩年』が医者立場から、感情を制御する視点で見つめている。

1. はじめに

老いはなかなか自覚できない。家族や周りの年下の人たちが本人の老いを早く認識する。人間は他人の目のなかで老い、そしてゆっくりと自らの老いを受容していく。疾病の場合は、治癒の可能性はあるが、老いは加齢に従い進行し治癒することはない。しかし、高齢者は、老化現象に対して病名を付けられ、病人であることを期待する。老いとは、老衰、老残、老醜に代表されるように、死への近さが、否定的なイメージを増幅させる。一方では、老成、老熟、老実などのように老いに対して、肯定的な意味を持つ言葉もある。私たちは、一人ひとりの長い人生の経験と、その蓄積の上に構築された老いの知を発掘し、老いの価値を見出すことが必要である。本稿では、高名な歌人で、精神科医である斎藤茂吉の老いの諸相を凝視することにより、その底流にある生死観を考察し、さらには宗教観にせまろうとするものである。

2. 老いの徴候

斎藤茂吉が、ミュンヘンのドイツ精神病学研究所に留学していた時の歌が次にある。当地には、1923（大正12）年7月から約1年間滞在した。

* 准教授／倫理学

München にわが居りしとき夜ふけて陰の白毛を切りて棄てにき

(『ともしび』大正14年「閉居吟 其一」)

41歳であった茂吉が、自らの肉体を冷徹に写生した回想詠である。陰の白毛は老いのまぎれもない象徴であり、老いを意識した眼差しであった。まさに、茂吉にとっては、老いの徴候であり、あるいは「老いの坂」の起点ともいえるのである。兼好法師は、「住みはてぬ世に、みにくき姿を待ちえてなにかはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」¹⁾とまでいう。とは言え、老いには個人差があるが、40代での早熟な老いの印象を免れないのは、茂吉の病歴を考えると、腎機能の障害との関連性があるろう。欧州留学前の1921(大正10)年7月6日に、東京で友人の神田孝太郎が健康診断をしたところ、尿蛋白が検出される腎臓の異常が発見された。しかし、茂吉には、留学を目前に治療や療養をするための時間的余裕はなかった。腫みたる足を、脚気のせいであるとし、オリザニンを服用したのであった。²⁾自らの病気を直視し対坐することを避け、むしろ病氣から逃走し、先延ばしにして留学したのであった。また、茂吉は、腎臓だけではなく、長崎医学専門学校教授時代には、スペイン風邪(インフルエンザ)に罹り生死を彷徨し、その後に咯血し、血痰が続くという最悪の健康状態であった。また、留学中にも、恐れていたように血痰を吐いた。³⁾結果的には不養生により、留学後に茂吉の腎臓は慢性腎炎へと移行したのであった。

朝々にわれの食ぶる飯へりておのづからなる老に入るらし

(『たかはら』昭和4年「日常吟」)

1929(昭和4)年1月7日、47歳となった茂吉は自らの尿を検査した。日記には、「一人診察。試ミニ尿ヲ検査シタルニ蛋白ノ反応著シ一寸悲観セリ」⁴⁾と記すように、再び尿蛋白が検出された。同年1月21日には、杏雲堂病院を訪ね、友人の佐々廉平の診察を乞うた。診断は、予想通り慢性腎炎であった。老いれば、食欲も減退してくる。これも老いの徴候であり、厳然たる現象である。この歌には、何とも言えぬ悲哀が漂う感じである。その後、食餌療法を試みるが、現実には食い意地がはって、好物の鰻を食べ、三日坊主で養生を止めてしまう。茂吉は、歌の如くに食欲が減退したとは言い難い。

ところで、茂吉が長崎医学専門学校教授を辞任し、欧州へ留学したのは、1921(大正10)年1月20日付、久保田俊彦(島木赤彦)宛の書簡にある「(當分以下他言無用)茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだと言はれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ」⁵⁾という決意に収斂される。そして、留学中は、刻苦精励し、研鑽を積み、学位を取得することができた。目的を達成し、研究の余暇には欧州各地を巡歴した。帰国後には、研究者となる「淡き淡き予感」⁶⁾を期待し、自信をのぞかせるのであった。しかしながら、茂吉は、欧州留学の帰途、船上にて養父紀一の経営する青山脳病院焼失の電報を受けた。1924(大正13)年12月29日に、火災が起こり、三百余名の入院患者の内、20名が焼死するという惨事であった。火災保険も11月に失効していた。この艱難に遭遇した頃を、次のようにうたう。

うつしみの吾がなかにある苦しみは白ひげとなりてあらはるるなり

（『ともしび』大正14年「随縁近作」）

留学中の茂吉は、儉約をし、今後の研究に必要な膨大な書物を購入し、先に自宅へ送っていたが、火災ですべてが焼失した。焼け跡を棒切れで突き、焼け残り本を取り出し、一枚一枚焼けた部分を鋏で切り取り、丁寧に干し、一冊の本に綴じた。この行為は、書物への愛惜というよりも、「淡き淡き予感」が完全に潰えた事への、茂吉の執着である。そして、余りにも過酷な現実の中で、茂吉は如何ともしがたい運命に翻弄され、短期間のうちに老け込み、苦しみを象徴するように白ひげが生えたというのである。茂吉は、この歌に関して「その頃自分の鬚髯はめっきり白くなったのを一首にした。島木赤彦はこの一首に感心してくれた」⁷⁾ という。帰国後の病院を取り巻く状況は、肺腑を抉るような負担を茂吉にかけ、老いをより一層加速させたのである。

その後、病院再建に着手するが、地元住民の反対があり、警視庁の許可も無かったため、郊外に土地を求め、東京府下松沢村（現在の世田谷区松原）への移転を決意した。しかし、何よりも病院財政は逼迫し、資金難となり、なれない金策のために駆けめぐった。1926（大正15）年4月7日に、漸く青山脳病院は再建された。ところが、患者の逃亡者が出たために、警視庁から院長の更迭を指示され、1927（昭和2）年4月27日に、茂吉は養父紀一に代わり、青山脳病院院長とならざるをえなかった。なお、元の青山には診療所が置かれ分院となった。翌年には、病院創設者の紀一が亡くなった。爾来、敗戦直前の1945（昭和20）年3月31日に、青山脳病院本院が東京都に譲渡され、松沢病院分院梅ヶ丘病院となるまで、茂吉は病院の代表である院長と臨床医としての重責を全うしたのであった。それは、茂吉が45歳から63歳までの約20年の期間であった。

ゆふぐれて机のまへにひとり居て鰻を食ふは楽しかりけり

（『ともしび』昭和2年「この日頃」）

これは、院長として多忙な激務にあって、大好物の鰻をひとりで食べるという、精神的な安堵感がひしひしと伝わってくる歌である。茂吉にとっては、誰をも寄せつけない、そして何ともいえない一人だけの至福の時間であり空間なのである。茂吉は、家族に対しては固陋で、癩癪もちであったが、一方ではユーモアに富む性格であった。

茂吉われ院長となりていそしむを世のもろびとよ知りてくだされよ

（『石泉』昭和7年「世田谷」）

これは、漸く青山脳病院の経営も少しは軌道に乗り、安定してきたので、年老いてきた茂吉のこれまでの艱難辛苦を少しでも、知って欲しいという、ユーモアの精神と哀愁が読み取れる歌である。⁸⁾

3. 老いの傾斜

1929（昭和4）年1月17日に、自ら検尿すると蛋白が検出されたことは前述した。慢性腎

炎へと悪化していた。そして、次の歌がある。

こぞの年あたりよりわが性欲は淡くなりつつ無くなるらしも

(『たかはら』昭和4年「所縁」)

茂吉が47歳の時であるが、老いれば、性欲も食欲も減退し、知足となる。論語では、「不惑」「知命」から「耳順」となり「矩を踰へず」となる。とは言え、必ずしも歌の如くに、茂吉は性欲が減退した訳ではない。

1931(昭和6)年5月7日に、またしてもインフルエンザに罹患し、痰と咳が年末まで続いた。

朝起キテ味噌汁ノ味ワロシ。体温計リタルニ三十七度アリ。ソレヨリー一寸臥床シテ后計リタルニ36°7グラキトナル。⁹⁾

同年12月31日の日記には、一年間を回顧して次のようにある。

今年ハ風邪ヲ幾度モ引キ、ソレカラ喘息ノヤウニナツテ転地シタリナドシテ苦シミ、コレガ持病ニナツテ死ムカモ知レント思ツタガ、幸ナコトニハソレガ直ツタ。院長トシテモ、アレハ歌ヨミデ医者デハナイナドト云フガコレモ力量ニ於テ實際ノ成績ヲアゲルノダカラ信用ガアルノデアル。スベテ神明ニ感謝シシヅカニ今年ヲ終リ、新年ヲ迎ヘヨウ。¹⁰⁾

さて、1933(昭和8)年11月8日に、ダンスホール事件に関連して、新聞に妻てる子のことが掲載された。それ以後、妻との別居生活が敗戦後まで続くことになる。茂吉にとって、深刻な精神的な負傷を受けた。茂吉の日記は、そのために7日間にわたり中断した。

11月14日には、「午前中、身体綿ノゴトクニ疲ル、故ニ診察休ム」¹¹⁾

11月21日「丸薬ノミ、辛ウジテ気ヲマガラスニ過ギズ。心臓ノ音ノ乱レ苦悶ヲ感ズ、苦シトモ苦シ」¹²⁾

11月27日「ウイスキー飲む。夜半ニ夢視テサメ、胸苦シク、動悸シ如何トモナシガタシ。コノマ、弱リ死ヌニヤアラントオモフバカリナリ」

12月3日「胸内苦悶アリ。時々心音不整トナル」

このように失意の中にあつた茂吉であるが、1934(昭和9)年9月16日に百花園で開催された正岡子規三十三回忌歌会の席で、永井ふさ子と遭遇するのであつた。茂吉が52歳、ふさ子が25歳であつた。その後、両者の交渉が始まり、恋愛へと発展していった。茂吉の没後に、ふさ子宛の書簡が公開され、赤裸々な、茂吉の愛の告白が綴られている。¹³⁾ 50代とはいえ、初老となつた茂吉の、肉声が聞こえてくる。世評がいう「老いらくの恋」と形容すべきものであり、「わが性欲は淡くなりつつ無くなるらしも」とは虚しく響くだけである。しかし、肉体的な老いは止めがたきであつたのであろう。

4. 老いの現実—大石田にて

1945(昭和20)年となり、空襲が激化したため、同年4月14日に、茂吉は単身で故郷の山

形県金瓶村に疎開した。妹なおの嫁ぎ先である、金瓶村の斎藤藤十右衛門家にある土蔵を借りたのであった。疎開後から、1か月余の5月25日には、青山の自宅も病院も空襲により焼失した。当時、自宅に残っていたのは、妻てる子、長男の妻美智子、次男宗吉（北杜夫）、次女昌子の四人であった。家を失い家族は離散せざるをえなくなった。6月6日には、てる子と昌子が、茂吉の許へ寄宿した。疎開先でも食糧事情が悪く、妻子三人の生活は、心身ともに苦痛をとまなうものであった。そして、8月15日の敗戦を迎え、藤十右衛門家の出征した三人の息子も帰還するので、てる子や昌子は帰京した。郷里とは言え、疎開先は、肩身が狭い生活を余儀なくされ、不自由な遠慮がちの日々を過ごしたのであった。

茂吉はすぐに上京すべきか逡巡したが、茂吉一人が1946（昭和21）年1月30日には、門人板垣家子夫（金雄）の世話により、大石田の最上川畔にある二藤部兵右衛門家の離れに転居した。この二階建ての離れを、聴禽書屋と名付けた。当時の大石田町は、戸数830、人口約4,600人で厳冬の地である。しかも茂吉が転居した年は、稀有の豪雪で、寒さも激甚であった。広い邸宅の庭に建てられた聴禽書屋は、四囲を高く厚い雪に圍繞され、室内は冷蔵庫の如く寒い状況であった。それが影響したのか、茂吉は、転居早々の3月に左湿性肋膜炎に罹り、5月上旬まで病臥し、療養に努めることとなった。家族と離れ、大患し、体力も気力も衰弱し、老いが進行したのであった。茂吉の日記には次のようにある。

三月十日、日曜、雪降ル、後小止トナツタ、（略）昨夜来左胸部ガ痛シデ困ツタ。モツトモコレハコヽニ転居以来ノ症状デアッタ

三月十一日 月曜 大雪、寒、左胸疼ム、風邪

○今日モ亦大雪デアアル。午前中新聞ヲ読シテソノマヽニナツタ。風邪未ダ痊エナク、左胸胸部ノ疼ガトレナイ。

その後、日記は6月10日まで中絶し、11日から書き継ぐ。

六月十一日 火曜、看護婦、手伝ニ来タ、晴レ

今日カラ看護婦ノ手デナク食事ハコンデモラヒ、体ガ疲労シタ。午前中寐タ、○午後一時カラ看護婦手伝ニ来タ。板垣氏来ル。¹⁴⁾

板垣家子夫の『斎藤茂吉随行記』によって、病気の経過を見ると、次のようである。少し冗長となるが引用する。山形の言葉での茂吉の「語り」をそのまま記しているのが如くであり、茂吉の人となり身近にせまってくる。この「語り」は、茂吉を理解するに極めて重要である。¹⁵⁾

三月十三日、起きるとすぐ先生のところに行った。玄関の戸を開ける音で分かるのであろう。廊下の襖の外に立った私に、

『板垣君だがっす。』

と声をかけられた。待ちかねていたのもあったろうか。だが、先生の声が何となく弱々しい調子であった。

『何たっす、先生。』

『少し熱があつてなつす。いつも八度五分位あるつす。今朝は七分だったす。』

『そりゃあ困つたなつす。先生、佐々木先生に来てもらつて診てもらた方がええんないがつす。風邪こじらして肺炎になつたりすつど大へんだざいつす。』

『ほだなつす。診てもらうにしても、もう少し様子をみてからにするつす。その上で工合悪いときは佐々木先生にお願いすることにするつす。』¹⁶⁾

その後板垣は、茂吉の水枕を求めに応じ、急ぎ帰宅し、氷嚢と水枕を持参し、外に積もつた雪をいれた。茂吉は、次のように感謝する。

『いや、どうもありがとう。君、大いに助かつたつす。』(略)

『板垣君、心配しなくともいいよ。風邪だから、二三日こうして寝ていると治る。それでも工合悪いときは、佐々木先生にお願いして診てもらうことにするつす。』

板垣は、三月十四日午前中か、或いは十五日午前中か判然としないとするが、佐々木医師が往診し、診察後に板垣が茂吉の症状を聞いた。

私は大変なことになるものだと、心中がっくりして戻つて来た。私を待っている先生が、
『板垣君、佐々木先生は何と言つていた。』

と聞く。嘘を言つては駄目だと思つて、正直に医師の言つたことをそのまま報告した。

黙つてうなずきながら聞いていたが、改まつた口調で、

『板垣君、俺が病氣したことは誰にも知らさないようにしてくれ。』

と言ひ、さらに語をついで、

『世間には俺が病氣をしたと知ると、ざま見ろと喜ぶ者が多い。いい気味だ、斎藤の奴くたばれと祈る者もいるから、決して人にしらせないようにしてくれ。』

ときびしい口調で念を押した。

『まさか先生、そんな者は居ねべなつす。』

『そうじゃない。君、絶対誰にも言つてやらぬようにしてくれ。』

三月十八日は、次のように記す。

午後から少し熱が出た。佐々木医師が往診して、その結果間違いなく左側肋膜炎であることを告げ、絶対静養することをすすめた。先生と医師は始終専門語を取り交わしていた。医師は症状が進行中なので、湿布をするよう注意してくれた。こうなればどうしても附添いの看護人が必要である。私は医師を送つて行き、細々と注意を聞いて来た。栄養も必要だという。どんなものがいいかと聞くと、バターなどがよいとのことだ。これも何とかして入手せねばならないと考えた。¹⁷⁾

また、『斎藤茂吉随日記』の「牀上片語覚え書」には次のようにいう。

『万一俺が死んだら、すぐ火葬にして骨にし、小包にして茂太のところに送つてくれ。わざわざ君が持つて行つたり、茂太をよんでも、死んでからは生きて来ない。』¹⁸⁾

三月三十一日には、肋膜に溜まつた水を採取した。何と二千CCもあった。

先生は寢床の上に、上半身裸にして背を向けて坐り、その背に向かつて佐々木医師が坐

り、看護の千代がこれもこわばった表情をして静かに音も立てずに動いていた。私が部屋に入ったのを気配で知った先生が、身動きせず低い声で、

『板垣君、君、見ない方がいい。気持ちを悪くするから。』

と言われた。水を採っているのだ。千代が側の洗面器を目で知らせる。それには、うす赤い血泡を立てて液が一ぱい入っていた。水だけでも洗面器に七八分はありそうだ。随分多い量であるのに驚いた。こんなに水がたまっていたんでは、呼吸が苦しかったのも無理はない。先生の強靱な忍耐というか、粘りに改めて驚いたのであった。（略）

洗面器をのぞいている私に、また先生が、

『そんなものを見るなよ、君。』と言う。

『なあに、先生、私はこんなを見ても決して気分なの悪くすねっす。』

と努めて平気に答えた。先生は、それなり何も言わなかった。その左の背には注射針がうちさされて、佐々木医師が静かに管の中に水を吸わせ採り、針からはずしては洗面器の中に出して、また針に嵌める。ほとんど赤く濁ったものばかりだった。この嵌め外しが、どんなに静かにやっても痛いらしい。先生は目を瞑って苦痛に耐えていた。無言の時が経った。今ではこの間が長いようにも短かったようにも思われるが、果してどうだったろうか。『もう水が無いようだなっす。』（略）

『佐々木先生、どれくらいたまっていたかなっす。』

『ほだなっす。二千ぐらいかなっす。採り針をしたんだが、余り水が出て抜かんなくなってしまって、こんなにたまっていたんなら太い針を使えばよかったが、そいつを持って来ていなかったんで、先生もなんぼか痛がったんないがっす。こんなにたまっていたとは思わなかったからなっす。』

『いや、お陰さんで胸が軽くなったようだった。佐々木先生、本当に有難かったす。』¹⁹⁾

肋膜の水を採取しても、解熱しなかった。佐々木医師が消炎剤である撒曹（サルチル酸ソーダ、略称ザルソー）を飲ませれば解熱するが、軍隊に持っていかれたらしく、大石田近辺の医者も、薬店にもないという。そこで、板垣は茂吉に内密に、長男の茂太宛に手紙を出した。この独断により、茂太が4月10日頃、撒曹を持参し来町した。服用後は、よく効果があり、数日中に平熱に戻った。余りにも顕著な効果であった。

次は、病臥中の歌である。

雪ふぶく頃より臥してゐたりけり気にかかる事も皆あきらめて
幻のごとくに病みてありふればこの夜空を雁^{かり}がかへりゆく
たたかひにやぶれしのちにながらへてこの係恋^{けいれん}は何に本づく

（『白き山』昭和21年「春深し」）

病中に頬から顎にかけて白髯がのび、額に皺を刻んだ。茂吉が最上川の岸辺に、麦わら帽子を被り、「たらばし」という藁でつくった丸い敷物に腰をおろした写真は、晩年の茂吉を象徴する一つとなった。茂吉は、1947（昭和22）年11月4日に上京するまで、大石田町で、約

1年9か月余りを過ごすこととなった。茂吉は最上川を中心とした大石田の風光、さらに芭蕉の曾遊の地であったことが念中にあり、大石田に疎開したのであった。そして、最上川の歌を多くよみ『白き山』という歌集に結実した。敗戦の悲嘆さを味わった茂吉であるが、この町の人々の善意と温情に心を洗われ、幸せな時間を過ごしたのであった。決して、流離や流亡ではなく、「敗戦を契機としてその晩年を郷土の風物と、周囲の人たちの敬愛の中に、ふかぶかと身をしずめた『回帰』のとき『いこい』のときであった」²⁰⁾のである。

さて、ここに一枚の写真がある。茂吉が帰京する日に、大石田で撮った写真である。中央に茂吉、左に板垣家子夫、右に結城哀草果の三人である。茂吉は上下の背広の正装に、古い中折れ帽子をアマダにかぶり、右手には杖がわりに蝙蝠傘を、左手には愛用の「極楽」を提げている。足元を見ると、いつもの愛用の草履や地下足袋ではなく、靴を履いているようだ。²¹⁾「極楽」とは洩瓶の代用としていたバケツのことである。晩年の茂吉を語るには「極楽」は有名である。

茂吉は、1936（昭和11）年10月16日に、木曾福島へ、木曾教育五十周年記念の講師として訪れ、「和歌の特質と作歌の態度」という題目で講演した。その後、汽車にて王瀧へ行き、小林旅館に投宿した。次は、その時の歌である。

この町に一夜ねむらばさ夜中の洩瓶とおもひバケツを買ひつ

（『暁紅』昭和11年「木曾福島」）

この歌は、茂吉54歳の時であるが、すでに「極楽」を使用していたのだ。バケツに付けられた「極楽」という名称は、秀逸で感心するばかりである。しかし、この時には、まだそのように呼ばれてはいない。加藤洵綾が回顧している。

「加藤君、先ほど散歩に街へ出た時、金物屋があってこれを買って来た。十五銭だよ。安いものだよ。」

「こんなもの東京へ持って行くんですか、何所にだってあるでせうが。」

「これは今夜の洩瓶だよ。僕は小便が近くてね、長い廊下を夜便所に通ふと、冷えてすぐまた行きたくなる。君十五銭で楽が出来るんだよ。」（略）

「僕はよく水洗ひし床の間へでも置いて行く。宿ではお客さん妙なものを忘れて行ったと思ふが、買ったばかりの新品なのだから、多分また水でよく洗って台所で使ふだろう。それでよいんだよ。」²²⁾

このように、茂吉はバケツを翌朝、新品なので何も言わずに宿に置いておくという。加藤は逆らうこともできず困惑したようだ。この茂吉の無頓着さは、何ともいえない。

さて戦後になり、大石田の生活では、「極楽」に大変世話になり、手放せなかった。取手のついた小型なものを、二つ常備していて、交替に使用していた。斎藤茂吉記念館には、この「極楽」が展示されている。²³⁾バケツをよく見ると、黒びかりし「茂吉 山人 洩器 昭和十五年」と墨書してある。山人とは、正確に言えば「童馬山人」のことである。茂吉は、腐食しないように、内側にコールタールを塗った。また、バケツは自ら洗い、井戸端で手を清め

ていた。散歩には必ず携行していたので、ときおり村人が空のバケツを見て、野菜などをバケツに入れてくれた。村人が「茂吉先生、持ってけらっしゃい」と言って、声を懸けたのである。茂吉は、ありがたく頂戴した。極楽は、茂吉の鼓動を直に伝えてくれるものだ。

茂吉は、1947（昭和22）年8月16日、東北巡幸中の昭和天皇に上山の村尾旅館で拝謁し、ご進講することとなった。天皇の御前にありながら、尿意が起こり中座することにならないか、最も心配なことであった。幸いにして、茂吉はその重責を滞りなく果たした。

5. 茂吉晩年

茂吉は1947（昭和22）年11月4日に、家族の住む世田谷区代田一丁目四百番地の自宅へ移った。そして、1950（昭和25）年11月14日には、新宿区大京町へ転居し、終の住処となった。最後の歌集『つきかげ』から、いくつか老いの歌を選んだ。

この体古くなりしばかりに靴穿きゆけばつまづくものを

（『つきかげ』昭和23年「帰京の歌」）

老身ろうしんに汗ふきいづるのみにてかかる一日いちにち何も能あたはむ

（『つきかげ』昭和23年「わが氣息」）

ひと老いて何のいのりぞ鰻すらあぶら濃過ぐと言はむとぞする

（『つきかげ』昭和23年「鰻すら」）

茂吉の鰻好きは、あまりにも有名である。しかし、その大好物の鰻すら、身体が受け入れられないという。食から老いを感じ取った、哀切さが伝わるのである。

みずからの落度などとはおもふなよわが細胞は刻々死するを

（『つきかげ』昭和23年「赤き石」）

この歌は、医者らしく自己の肉体を冷徹に見つめ、老いがあるがままに受容する諦念が凝縮されるようだ。

朝のうち一時間あまりはすがすがしそれより後のちは否いなも応うもなし

（『つきかげ』昭和24年「一月一日」）

朦朧もうろうとしたる意識を辛うじてたもちながらにわれ暁あかつきに臥す

（『つきかげ』昭和25年「暁」）

わがかしらおのづから禿はげて居りしことさだかに然しかと知らず過ぎにき

（『つきかげ』昭和25年「時すぐ」）

わが色欲しきよくいまだ微かすかに残るころ渋谷の駅にさしかかりけり

（『つきかげ』昭和26年「無題」）

茂吉は、1950（昭和25）年10月19日に軽い脳溢血を起し、左半身に麻痺がおそった。完全麻痺ではなく不全麻痺であったので、次第に軽くなっていったが、その後は左脚を軽く引きずって歩くようになった。10月24日には胸内苦悶があった。長男の茂太によれば11月9日

には「佐々廉平先生が見舞いに來られて診察された。その際の診断は、腎硬化症兼左半身アタキシーで、血圧 230～120 であった」²⁴⁾ という。

茂吉の門弟である佐藤佐太郎の『斎藤茂吉言行』の同年 11 月 1 日には、によれば次のように記す。

「僕のは脳溢血のかるいようなものだな。医者が看護婦をつれてきて、瀉血をしたりしても相当とられるからね。こんなことならからだをらくにしていればよかったんだが（仕事をしないでという意）。死亡の死だな、死の夢ばかり見るよ。ほんやりした状態で見ているんだなあ。そういうときは小便にでも起きてしまえば意識がはっきりするんだが、苦しい状態で夢を見ているからね。佐藤君、人にはいわないでくれたまえ。」（略）

「このごろ幽霊のようなものが出てくるよ。いまさらそんなものをみるのは悟りを開かないようだが、悟りは開いていても現実に苦しいからね。こんどはひとつ工夫して机の前に坐って十時ごろまで起きてみようとおもうんだ。」

そうしていれば歌も出来ましょうという、

「そうだ。歌はもうボケてしまってだめだが、それでもかまわない作っておこうとおもうんだ。麻痺があるとボケるもんだからね。これは佐藤君承知してくれたまえ。土屋君などは僕のボケてゆくところをひややかに傍観しているような気がするが、」²⁵⁾

11 月 25 日には、次のように記す。

「恥ずかしい歌を作っているよ。頭がぼおとして朦朧としているからね。意味の通じないような歌ではずかしいが、出たら読んでくれたまえ。（略）」

「僕もこれでこんどは自分の家だから。代田でも自分の家だが、なんだかおちつかなくて自分の家という感じはなかったな。ここでしずかにして、気のあった友人だけに会うということにして、頭がはっきりするようになれば、（語尾不明、しばらく間）ここは（脛を指で軽くたたく）ここは（頭の右耳の上をたたく）いっしょだな。これで記憶が恢復するようならいいんだが。僕の歌もいよいよぼけてしまったなんと歌壇からいわれるんじゃないかな、僕のは意識がなくなるからいいんだが、意識がなくなれば死ぬからね。」²⁶⁾

1951（昭和 26）年 2 月 24 日には、次のように記す。

「このあいだじゅうちょっと具合が悪くてね、もうだいたい元気になったが、しゃっくりが出てとまらないで、なんだかこんどはまいるような気がしたな。医者が来てだめなときはだめなものだね、佐々（廉平）君が診てくれたが、なにだじょうぶだなんて、帰るとまたコキリ、コキリとしゃっくりが出てね。」²⁷⁾

佐藤佐太郎は『斎藤茂吉言行』の後記で次のようにいう。

晩年になって、先生の健康が徐々におとろえ、頭脳が徐々におとろえてゆくのはいたいたしかった。私の手帳には昭和二十七年の記録もすこしあるが、私はぎりぎりの限界のところで清書をうち切った。（略）先生は病気によって肉体がおとろえ頭脳がおとろえた。先生は家族の中にだけあって静かに残生を送られるのがいい。これ以上私などが先

生を見てはならない。²⁸⁾

門弟の佐太郎は、茂吉は病気で肉体が衰えたのから、頭脳も衰えたという。決して、老いて頭脳が衰えたとは記していない。老いの現実を赤裸々に語ろうとしない。そして、1951（昭和26）年12月29日をもって、言行の記録を終えている。その後の、茂吉の老いを弟子として公にするには抵抗があったのである。

田中隆尚の『茂吉随聞』の1952（昭和27）年3月3日には、次のようにある。

「めずらしいな」と、先生は私を見て驚いたやうに云はれる。私は始終来てゐたのに、恰も久しく音信を絶つてゐた者を見たやうに云はれた。（略）

「ほんとに暫くでした。お身體はいかがでせうか。」

「衰へたよ。衰へたねえ。」

先生は立止って玄関の履物棚に身體を支へられる。美智子夫人がその間ずっと附添つてゐる。（略）

「一週の中木金土の三日暇になりましたから、少しはお手伝出来ると思ひますが、少しづつ口授でもなさいませんか。」

「いやだめだねえ、衰へたよ。ほんとに衰へたんだ。」

先生がかう繰返し云はれるので、私は慰めやうもない。嘗ては常に光を宿してゐた先生の眼がうるみ、無気力の柔和なまなざしになってゐる。そしてちっと立ってゐられるのさへ覚束ない。²⁹⁾

田中は、茂吉の現状をあるがままに伝えようとしている。しかし、田中も1952（昭和27）年12月5日で終わっている。

柴生田稔の『続斎藤茂吉伝』では、次のようにいう。

昭和二十六年四月五日、私はやうやく外出できるようになって、九ヶ月ぶりに茂吉宅を訪れた。対面した茂吉は、すでに顔面の筋肉が弛緩して、別人のやうな風貌になってをり、私は何とも言ひやうのない衝撃を受けた。（略）

私は幾度か大京町を訪れたのであったが、その間に茂吉の能力が、徐々にではあるが、確実に低下しつつあることに気がついたのは、やはり言ひやうのない衝撃であった。私はできるだけ茂吉を訪ねて色々質問し、茂吉の脳に働いてもらつたなら、あるいは能力をよみがへらせることも可能ではないかとも、素人考へで考へてみたのであるが、結局さう繁々と訪問することもできなかった。（略）

茂吉が、ほとんど口を利くのもおっくうにするやうになった頃の或る日、夫人が、以前は机に向つて何か彼にかしてゐたのですが、もう全く今は何にもしなくなりましたと、寂しさうに語られたことを、私は忘れることができない。さうして、その時も茂吉は私たちの傍に茫然としてゐたのであった。おそらくそれより大分後に、私は強ひて茂太氏に願つて、茂吉に会はせていただいたことがある。布団の上に物憂さうに横になった茂吉を一目見た時、私はたまらなくなつて、思はずその手首を堅く掴んだ。たちまち痛い痛いといと

ういふ叫び声が挙って、茂吉は憎々しさうに私を睨みつけた（と私には思はれた）。これが、茂吉の言葉を聞いた最後であった。³⁰⁾

このように門弟は、茂吉の認知症の姿を公にすることに、抵抗感があり、ある程度の段階で押さえている。柴生田は、茂吉の老いに愕然とし、いたたまれなかったのである。茂吉は、すでに門弟の柴生田であることを、認知していない。むしろ、医者である長男の茂太や、次男の宗吉（北杜夫）が、茂吉の肉体的老いを医者之眼から、ありのままに冷徹に見つめ、その記録を公刊している。

長男の茂太は自らの「病床日誌」で、1951（昭和26）年の12月9日に次のように記す。

父、このところ連日両便失禁あり。少しく *apathisch*。明日よりビタミンBC注射を再開す。³¹⁾

Apathisch とは、痴呆的という事である。1952（昭和27）年4月6日になり、茂吉は再び呼吸困難の発作に襲われた。「病床日誌」に次のように記す。

午後九時五十五分、ゼイゼイという音に隣室の母が気づく。急に呼吸困難起りたり。十時茂太かけつく。父は右を下にして、呼吸浅表。冷汗淋漓。直ちに、ビタカンファ二cc、アミノコルジナーcc皮注。十時二十分、脈一三八、呼吸四一、口唇、指端チアノーゼ、足先にもチアノーゼ。苦悶状、しっかり茂太の手をにぎる。枕頭には、母、私、美智子、昌子、看護婦二名がいる。十時二十五分、綿棒にてのどの痰を取らんせしも、却って苦しがり中止。瞳孔かなり散大、対光反射あり。「寒くない、有難う」と云う。室温十七度。（以下略）³²⁾

また、次男の宗吉（北杜夫）は、昭和27年1月初旬の自らの「日記」に次のように記す。

正月帰省の折の父。ほとんど一人で歩けない。食堂まで手をひかねばならぬ。ツヴァング（強迫）的な笑い、なにかにつけ（おかしくもないのに）一分くらい笑っている。と思うと、腹を立てて何か言う。ゼニーレ・プシコーゼ（老人性精神病）みたいになった。僕たちの話もあまり理解できぬようだった。³³⁾

この症状は、精神医学では「感情失禁」と呼ぶもので、感情の抑制がきかない状態である。さらに、7月21日には、次のように記す。

昨日見えた山形の重男（四郎兵衛の息子）さんが帰るとき、父は山形へ行くといつてきかぬ。挨拶して握手して出て行こうとすると、玄関で「ちょっと、ちょっと」ととめる。「靴を出せ」と言う。食堂にきてからも、「上野へ行く」などと言う。食堂で坐っていて、そのまま *Harn*（尿）をしてしまう。ときどき、「コラ、コラ」「なんだ、なんだ！」と叱責するように言ったり、たまには憤怒の形をして「糞くらえ！」などともいう。

机、柱、壁に掴まって辛うじて歩く。しかし、大声を出すので誰かが手をとると、その手をぐいと掴む。父の手—白いうすい皮膚の下から血の色が浮かんで、なかなか色はよい。爪は縦に長い。静脈が太く浮いている。汗ばんでじっとりしている。粘着力のある掴み方

をする。

ゲニタリエン（陰部）の毛はほとんど白い。ホーデンはやっぱりゼンドウしている。そして（サルマタはなし）尿臭。

目はひどくしょぼしょぼしてきた。ときどき薄く目を閉じて、そのまま上前方を見つめるようにする。そして、目をひらいてそれをまたたかせる。³⁴⁾

このように茂吉の記憶力は低下し、「手帳の置場所を幾度にも」忘れ、その姿を周囲にも示した。

茂吉は、昭和28年2月25日に、心臓喘息のため亡くなった。享年、満70年9月であった。次が、『つきかげ』に最後に収録された歌である。

いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも

（『つきかげ』昭和27年「無題」）

茂吉は、戒名と墓を生前に用意し、死への準備は万全であった。戒名は、すでに昭和9年に「赤光院仁譽遊阿暁寂清居士」と決めていた。52歳の時である。さらに、墓は昭和12年に「茂吉之墓」とし、自ら書いた。師の伊藤左千夫の墓よりも小さくするように要望した。墓は分骨して、郷里金瓶の宝仙寺と東京の青山墓地にある。

6. まとめ

柴生田稔は、これまで門弟が茂吉の認知症に関して論じなかったので、『続斎藤茂吉伝』の「あとがき」で、「茂吉が脳に障害を生じた以後の経過を取へて隠蔽しなかったのは、文学者としての茂吉の名誉を守るための必要措置と考へたからである。」³⁵⁾ という。とは言え、認知症の行動を、あからさまに詳細に記したものではない。認知症であったという事実を記したのである。門弟にとって、茂吉の認知症のことは、触れたくない事柄であった。ところが、医者立場から息子たちは、長男の茂太は『茂吉の体臭』で、次男の宗吉（北杜夫）は『茂吉晩年—「白き山」「つきかげ」時代』で、茂吉の行動をありのままに記した。³⁶⁾ ことに、北杜夫の『茂吉晩年』での茂吉の行動記録は、門弟にとって、あまりにも忍びえないものであろう。時が経過して、公になったともいえよう。

茂吉は、自らの老境について、老いに抵抗することなく、随順する姿勢がうかがえる。茂吉は、1949（昭和24）年12月16日、「夕刊都新聞」（京都）に「老境」という随想を寄せ、次のようにいう。

私はまだ七十にもならぬから、「老境」などといふ註文には応ずるななどといひますけれども、去年あたりから、急にいきほひが無くなりましたやうです。（略）はじめのうちは徒歩で元気よく通ひましたが、去年も暮れ、今年のはじめごろになりますと、歩行が難渋になりました。実にかしなものだ。（略）

前には返信をせぬといふことが気になって為方がなく、そこでいやいやながらも返信をし

たものだが、このごろは、万事が気にかからぬやうになった。気にかからぬから、万事をうつちやておくといふことになる。この事柄をおしひろめて行けば、『死』などいふ事柄だって、若い者のやうに気にかからぬことになって、わりかた気楽に往生が出来るのではないかとおもはれるのである。(略) 毫ろくしたものは、そんな手数もいらず、はたからの手数もいらずに、往生できるのではあるまいか。³⁷⁾

このように、毫ろく(毫碌)という、老年にとって、嫌悪する言葉も茂吉は自然に使用している。そして、柴生田稔が「昭和二十四年ごろから老身の衰弱著しかったが、最後の最後まで作歌を止めず、『老年』の心境をその極限まで追尋している」³⁸⁾と記しているように、茂吉は、作歌の創作意欲は衰えることなく、作歌することで自己の老いを解放し昇華していったのである。

注

- 1) 『徒然草』第7段。
- 2) 拙論「斎藤茂吉の病氣観」文京学院大学外国語学部紀要8号、104～105ページ参照。
- 3) 朝々に少しづつ血痰いでしかどしばらく秘めておかむとおもふ(『遍歴』大正13年「ドナウ源流行」)
- 4) 『斎藤茂吉全集』第29巻、岩波書店、1973年、605ページ。
- 5) 第33巻、410ページ。
- 6) 医学の書あまた買求め淡き淡き予感はずねに人に語らず(『遍歴』大正13年「欧羅巴の旅」)
- 7) 斎藤茂吉『作歌四十年』筑摩叢書、1971年、115ページ。
- 8) 現在、都立梅ヶ丘病院門前に歌碑がある。
- 9) 第30巻、36ページ。
- 10) 第33巻、111～112ページ。
- 11) 第30巻、323ページ。
- 12) 同巻、324ページ。
- 13) 永井ふさ子『斎藤茂吉・愛の手紙によせて』求龍堂、1981年
- 14) 第32巻、170ページ。
- 15) 北杜夫『茂吉晩年「白き山」「つきかけ」時代』岩波現代文庫、2001年、90ページによれば、山形県内でも上山と大石田の言葉は異なっているが、「茂吉はすぐそれを吸収し、会話にも大石田弁を用いたのであろう」という。
- 16) 板垣家子夫『斎藤茂吉随行記』上巻、古川書房、1983年、194～195ページ。
- 17) 同書、207ページ。
- 18) 同書、218ページ。
- 19) 同書、220～221ページ。
- 20) 山上次郎『斎藤茂吉の生涯』文藝春秋、1974年、524ページ。
- 21) 『新潮日本文学アルバム 斎藤茂吉』新潮社、1985年、91ページ。
- 22) 第33巻、月報23、7～8ページ。
- 23) 財団法人斎藤茂吉記念館(山形県上市市北町字弁天1421)
- 24) 斎藤茂太『茂吉の体臭』岩波現代文庫、2000年、58ページ。

- 25) 佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』角川書店、1973年、355～356ページ。
- 26) 同書、349～360ページ。
- 27) 同書、355ページ。
- 28) 同書、385ページ。
- 29) 田中隆尚『茂吉随聞』下巻、筑摩書房、1960年、330ページ。
- 30) 柴生田稔『続斎藤茂吉伝』新潮社、1981年、442～443ページ。
- 31) 斎藤茂太、前掲書、67ページ。なお、北杜夫『茂吉晩年』で引用されているが、apathischに対し、（痴呆的）と付加している。
- 32) 同書、71ページ。
- 33) 北杜夫、前掲書、259ページ。
- 34) 同書、267ページ。
- 35) 柴生田稔、前掲書、450ページ。
- 36) 『茂吉の体臭』は1963（昭和38）年に、『茂吉晩年—「白き山」「つきかけ時代』』は1998（平成10）年に岩波書店より刊行され、現在は岩波現代文庫に収録されている。茂吉没後10年後の前者と没後45年後の后者では、時代状況が大きく変化していることを勘案しなければならない。
- 37) 第7巻、768～769ページ。
- 38) 山口茂吉・柴生田稔・佐藤佐太郎編『斎藤茂吉歌集』岩波文庫、1958年、303ページ。（柴生田稔の解説）